広報 2024 2月
No.1240 第1金曜日号

ひらつか

思いを込めて

昨年の秋、広川にある金旭中学校の学校祭で、大鍋で豚汁を作っていたPTA役員たち。
「おいしそうな匂い!」「早く食べたい!」と生徒たちの声が、渡り廊下に響いていた。

目次

1～3面… 特集 多様化するPTA…保護者と教職員が協力して、子どもを見守り成長を支えるPTA。
運営方法を見直すなど、工夫して活動する市内公立3校のPTAを紹介します。
4～7面…「自動運転バスが走る」・募集・お知らせ・健康と福祉 「認知症を知ろう」「身近な話題」
8面…ヒラツカルチャー 「きてみて！博物館」

ひらつか議会だより

平塚市の推計人口と世帯数
<令和6年1月1日現在 ( )内は前月比>

人 口 258,500人…(+11)
世帯数 116,967世帯…(+67)

●発行 平塚市 ●編集 広報課 ●法人番号 3000020142034 〒254-8686 神奈川県平塚市浅間町9番1号 ☎0463-23-1111 FAX 0463-23-9467

●配布のお問合せは、ミッド ☎0120-350311(月～金曜日、午前9時30分～午後5時)

多様化するPTA

保護者と教職員が協力し、子どもを見守り、成長を支えるPTA。今号では、運営方法を見直すなど、工夫して活動する三つの市内公立小中学校PTAを紹介する。

問　社会教育課☎35-8123

PTAってどんな団体?

PTA：Parent Teacher Association（ペアレント テイーチヤー アソシエーション）の略称。日本語訳は「父母と先生の会」。

PTAは昭和21年頃から全国的に推奨された社会教育団体。子どもの健やかな成長を図ることを目的としている。各学校のPTAは「単位PTA（単P）」、単P全体の取りまとめなどをする団体は「PTA連絡協議会（P連）」と呼ばれている。現在、平塚市立小・中学校の全43校に、単Pがあり、その全てが市P連（3面左下囲み）に加入している。市社会教育課の木村圭太主査（上写真）は、「PTAは独立した存在で、平塚市でも学校によって規約などがあり、運営方法もさまざまです」と説明する。単Pが単独でできないことなどは、市P連が窓口となって、一緒に考えたり、要望書を取りまとめて市に提出したりしている。「時代の変化に応じて、さまざまな見直しをする中でも、目的は変わらないと思います。子どもたちのための活動が途切れずに続くように、市としても応援していきたいです」。

子どもを思い、続く伝統

金旭中

「学校祭で豚汁を食べるのを、子どもたちが毎年楽しみにしてくれているんです」と、金旭中学校PTA会長の早川誠さん（右写真）は話す。学校祭の豚汁作り（1面）が始まったのは20年前。防災時の炊き出し訓練も兼ねている。豚汁作りの前は、マラソン大会を終えた生徒に、お汁粉を作り振る舞う時代もあった。行事で振る舞われる大鍋料理は、世代が変わっても生徒に愛されている。

広がる協力の輪

PTA役員と、部活動の健全な育成・振興に寄与することを目的とする部活動育成会の運営でスタートした豚汁作りは、協力の輪を広げていった。「PTA役員だけでは大変な部分を、地域団体などの力を頼るようになりました」と早川さん。「昔から女性役員の割合が多いので、大鍋の豚汁を分配した重たい食缶を、役員だけで各クラスに運ぶのは、毎年大変だったんです」と続ける。現在は、同校区地域教育力ネットワーク協議会や同校地区青少年指導員、卒業生などの父親で構成される「おやじの会」の協力がある。加えて前回から、前年の卒業生もボランティアとして参加するようになった。

大鍋で作った豚汁（1面）を食缶に分け各教室まで運ぶ。卒業生ボランティアやおやじの会が活躍

家庭に寄り添う

タイムスケジュールも、前年の反省を生かして、毎年変更している。今回は前日準備の時間を変更した。小学生の家庭も多いことから、子どもの帰宅時間などを避けた時間帯に変更するのはどうかと、本部役員から提案があったそうだ。「参加できる方が来やすい時間帯を、聞き取りました。多くの人が集まることで、準備時間の短縮にもつながって、みんなが早く帰れますからね」。話しぶりから参加する役員らへの思いやりが見られた。また、運動会に参加した一部の役員には休んでもらうなど、年間を通して役員の負担を分散できるように配慮もしていた。

心に残る思い出を

早川さんは「学校祭で豚汁を食べたことは、金旭中学校に通っていたからこそできた、地域らしい思い出になると思うんです。喜んでくれる生徒たちのためにも、これからも大切にしてほしい伝統です」と思いを語る。「直接生徒たちが喜んでいるところを見ると、やりがいを感じます。役員からも『やって良かった』という声を多く聞く活動です」。

早川さんは、副会長・会長として本部を務めた2年間で、できる範囲で恒例のやり方を見直してきた。「地域・保護者・先生がここまで近い距離で、学校生活に関われるのは中学校が最後だと思うんです。親の都合だけでなく、生徒たちへの影響を1番に考えた選択を、今後役員をされる方にもしてもらえたら、と思っています」と力を込めた。

①

②

③

①PTAが生徒一人一人に配膳
②一味唐辛子を持参して豚汁を味わう生徒③生徒たちからは、毎年お礼の寄せ書きや手紙が届く

役員の声を聞く

八幡小

「スケジュールは毎年同じでも、役員は毎年入れ替わります。次に役員になる方が楽をできるように、運営方法などを考えていきました」と話すのは、八幡小学校PTA会長の鳥飼裕之さん（左写真）。少しずつ現状に合うように、役員の仕事分担などを考えていったと振り返る。

仕事の偏りなくす

「役員から相談を受けたり、各委員会で負担が大きくなっていたりした仕事を見直していきました」と鳥飼さん。「行事を手伝う回数など、仕事量が平等になるようにしています」と続ける。

見直しの一つが「PTAだより」の電子化だ。「5人いる本部にも仕事量に偏りがあったんです。なくせる仕事はないかどうかを聞いたときに、挙がったのがPTAだよりの印刷・集計などの作業でした」と説明する。毎回、約300部を本部役員3人で用意していた。せっかく時間をかけた便りも、紙だと保護者の元に届かず、子どものランドセルの底に……なんてこともしばしば。「現在はPDFにした便りを、学校の協力を得てメールで各家庭に送っています。少しでも負担が減らせて良かったです」と安堵（あんど）した表情を見せた。

ハードルを上げない

鳥飼さんは各会員に、「できる範囲で」の言葉を繰り返し、

平塚市役所 〒254－8686 平塚市浅間町9－1 ☎0463－23－1111 FAX0463－23－9467

ボランティア制導入へ

旭小

コロナ禍で、PTAの活動もさまざまな制限を受けてきた。旭小学校では元の形に戻すのではなく、3年ほど前から希望の声が強まっていた「ボランティア制」の導入を決めた。令和6年度からの移行に向け、規約の改定など、準備を進めている。

役員ノルマの減

ボランティア制では、本部役員と児童の登校時の安全を守る校外委員会を除き、「できる人ができるときにやる」という体制に変える(左囲み)。同校保護者と教職員の会、会長の向由季未さん(左写真)は、「ボランティア制を取り入れることで役員の数が減り、『6年間で一人一役』という雰囲気のあった役員ノルマがなくなります」と話す。本年度、本部と5部門の運営委員会で全44人いた役員は、令和6年度から本部と校外安全委員会の全17人だけになる予定だ。「役員の中だけで選出していた活動を、保護者全体にお声掛けして、できる方にお願いする形に変わります」と説明する。ボランティアを募る具体的な活動は、広報紙作成や花壇整理、割ぽう着点検・カーテン洗いなど。また、学校が役員だけにお願いしていたちょっとしたお手伝いも、保護者全体から募れるようにする。役員だけにかかっていた負担の軽減も新しい体制の良さだ。

任意の子ども応援金

新たな体制では、活動資金である「会費」がなくなる。今後は「子ども応援金」として任意で集める方針だ。会員から集める「会費」は、学校での触れ合い活動費や、登下校路の安心安全に係る費用など、全児童のために使われている。もちろん、保護者が会員であるかどうかは関係ない。「保護者間での不平等をなくすためにも変更します」と向さんは狙いを話す。「子ども応援金」であれば、全ての保護者が児童のために使われる活動資金に協力できるようになる。

協力者を募る

来年度からの導入に向け、本年度は保護者に周知し、協力者を募る期間。新たな形は、保護者から肯定的に受け入れられている。

「本部役員からの一方通行ではなく、保護者の皆さんがやり取りできて、協力を呼び掛けやすい体制をつくりたいと思っています」と向さん。全保護者が参加しやすいよう、利用者の多いスマートフォンアプリ「LINE」で、登録ややり取りが簡単な「オープンチャット」機能の活用を検討中だ。「始めてみないと分かりませんが、保護者同士で気軽に企画などができるようにしたいですね」と展望を語る。

一方で、活動には参加しないと決め、学校・保護者とのつながりが薄くなってしまう人が出るのを心配する向さん。「活動の中で、子どもの学校生活を知ったり、保護者同士がつながったりできる時間の大切さを感じています。集まりやすい活動時間を設定するなど、工夫して協力を呼び掛けていきたいです」。

全てが子どもに還元

今は保護者のほとんどがフルタイムの仕事をしている時代。向さんは、任意団体のPTAに未加入の方がいるのは仕方がないと捉えつつも、社会的な流れに不安も感じている。「地域とのつながりや、安全に登校できる環境づくりは、一度なくなると簡単に戻せるものではないと思います。必要な役割は引き継がれ続けてほしいです」。

子どもたちの安全を守るために、定期的に直接顔を合わせて、地域とのつながりをつくる役割は本部役員や校外委員。衛生的な学校の環境を守るための割ぽう着点検やカーテン洗いなどの役割はボランティアで募った協力者。体制が変わっても、活動の全てが子どもたちに還元されることは変わらない。

旭小のボランティア制では何が変わるの？

これまでの体制

前役員が次の役員を決める。会員にアンケートを取り、役員をしたことがない方に一人一人声を掛ける。

会員A(役員)：次の方を探すのが大変だ。

会員A：次の役員をお願いできませんか？

会員B：「6年間で一人一役」ですもんね。分かりました(忙しいのになあ……)。

ボランティア制

役員数が減り、役員ノルマも減る。これまで役員がしていた多くの活動は「できる人ができるとき」にする形に!

会員B：連絡はLINEの「オープンチャット」に届くのね。スマホですぐに確認できるし、話し合いも個別にできて便利だわ。

会員B：今回募集があった活動は協力できそう！参加してみよう。

会員A：今回は仕事で参加はできないけど、応援金で協力しようかな。

会員B：これからは、それぞれができる形で子どもたちのために協力できますね。

未来の教育環境を守りたい

市PTA連絡協議会 伊澤(いざわ)克明会長

時代が変わり、全国的に保護者の学校との関わり方、考え方も多様化してきました。平塚でも少しずつですが、会員と活動資金の減少、役員のなり手がいないなどの課題に直面する単位PTAが出てきています。こうした状況を受け、今後の活動方針を決めるときに、まず考えてほしいと呼び掛けているのが「本来の役割は何か」です。1回制でできるボランティアと、一定期間同じ人が責任を持ってやるべき活動との違いを考えていく必要があります。行事の運営を工夫したり、子どもの異変に気づいたりするのは、一定期間責任を持ってやるからこそできることだと思います。

この数十年PTAは、教員と保護者、地域とのつながりをつくり、教育環境を整える役割を果たしてきました。もしなくなったら、多忙な教育現場の負担が、さらに増えてしまいます。多感な時期の子どもたちが過ごす、教育環境の質が落ちていくのは避けなければいけないのです。

単Pが運営しやすいように

市P連では、校長先生や単Pの会長との連絡会や研修会を、定期的に開いています。単Pが抱える課題を共有したり、解決につながる情報を得られたりする場となっています。単Pが孤立してさまざまな悩みを抱え込まないために、こうした情報交換の機会は大変重要です。市P連も単Pも、目の前の課題だけでなく、これからの変化を見越して備えることが求められていると思います。単Pと一歩離れた存在として、単Pが運営しやすくなるように、運営体制の在り方などを考え続けていきたいです。

↙し掛けてきた。「前年よりも良くしようとハードルを上げると、負担も大きくなってしまいます。限りある時間の中でも協力的な皆さんに、無理なく活動してもらえるよう、お声掛けしてきました」と役員への思いを語る。

地域と学校をつなぐ

体制などを変化させていく中でも、鳥飼さんは地域とのつながりづくりを、注視する。「日頃から地域の方には、登校班の見守りなど、熱心に子どもたちを気に掛けていただいています。ありがたいですね」と感謝を語る。こうした関係づくりのために、同校PTAが大切にしているのが「やわたふれあいフェスティバル」だ。本年度は昨年11月25日に開かれ、自治会や体育振興会など、地域の9団体が参加した。「今回も楽しそうに、地域の方と触れ合う子どもたちの笑顔が見られましたね」とほほ笑む。主催するPTAにとっても、学校で過ごす児童を知る貴重な行事だ。「今回も多くの役員が力を貸してくれました。PTAの出し物は、役員が考えているんですよ」。企画した「シルエットクイズ(箱に入った物の影を見て当てる)」(下写真)とオリジナルのトートバッグ作り(左写真)は、児童に大好評。「子どもたちの喜ぶ姿は、活動の原動力になりますね」。

自動運転バスが走る

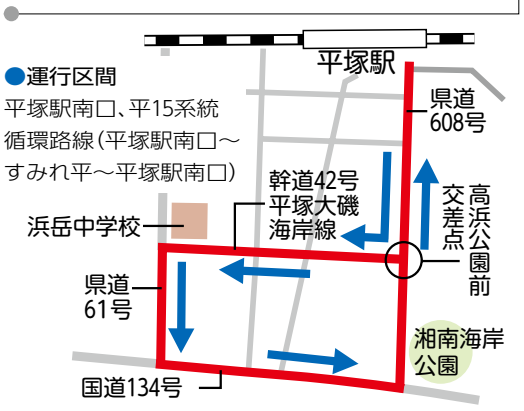
少子高齢化・人口減少などによって公共交通の持続性が課題となる中、解決策の一つとして期待されているのが「自動運転技術」。市は、2月2日（金）まで、自動運転バスの実証実験に取り組んでいます。

問　交通政策課☎21-9840

車両搭載センサ

① 前後左右にLiDAR（障害物や車両などの検知）
② 望遠・広角カメラ（信号の色を検知する他、周辺環境検知の補助）
③ ミリ波レーダ（側方の車両を検知）
④ 遠隔監視用カメラ

高精度な3DマップとLiDARが得る情報を照合して、自車位置を推定し、走行軌道をなぞって自動走行します。



平塚市では市内で唯一の鉄道駅「平塚駅」を中心に、小田急線沿線駅などに向けて約70系統の路線バスが走っています。バスは市民生活に欠かせない公共交通です。

一方で運輸業界では運転士不足が深刻化していて、全国各地で路線バスの廃止・縮小が見られ、平塚市でも人ごとではありません。市全体のバス路線を今後も維持し、市民の移動手段を確保しなければなりません。そのために自動運転技術の導入が可能な路線に対して、バスの自動運転化を取り入れていくために、実証実験をしています。

自動車メーカーが直接参画

本年度、全国の60自治体が国から自動運転実証実験の事業採択を受けています。そのほとんどは10人乗り程度の小型モビリティです。「平塚市での実証実験は、既存路線バスと同等の全長約11メートルで、いすゞ自動車が自動運転を前提に開発した大型バスを使用していることが特徴です」と、市交通政策課の廣永倫明（ひろながみちあき）主査（右写真）は話します。自動車メーカーが直接参画して、自動運転バスの実証実験に取り組む例はあまりないと言います。1月19日には、地域公共交通のDX推進に向けて、神奈川中央交通・三菱商事・アイサンテクノロジー・A―Drive（エー ドライブ）・いすゞ自動車・平塚市で連携協定を結び、官民一体となって、安心・安全な自動運転バスの実用化に向けて取り組みを進めています。

三つのポイントを含んだ検証

point 1 既存バス路線の自動運転化

静かでスムーズに走り出し、交差点付近ではスピードを落としてゆっくり進入、安全を確認して進んでいく自動運転バス。今回の実証実験は三つの検証ポイントがあります。

実証実験の運行ルートは平15系統で、平塚駅南口を出発して、すみれ平を経由し、平塚駅南口に戻ってくる、走行距離4・3キロメートルの循環路線です（上地図）。道幅、交差点の信号機の設置、交通量などを総合的にみて、道路環境が整備されているため、モデルルートとなりました。神奈川中央交通運輸計画部の富永勇輝課長（左写真）は「『既存のバス路線を自動化する』ということにこだわって運行ルートを選びました」と話します。全ての路線を自動運転化する訳ではありません。自動運転を取り入れる路線、人が運転するべき路線を見極めるために、モデルルートでまずは自動運転レベル2（右囲み）の走る・曲がる・止まるを、しっかり自動で走れることを検証します。

point 2 自動運転バスを見守る遠隔監視

将来的には、運転士が乗車しない自動運転バスの車内を誰かが見守る必要があります。今回の実証実験に合わせて、神奈川中央交通本社内に「遠隔監視室」を造りました。実証実験期間中に、バス車内を監視し、車内で想定されるお客様対応などを検証します。

point 3 交差点を安全にする補助システム

交差点に設置したセンサが検知する対向車や歩行者、自転車の位置・速度などの情報と、信号機に設置した装置による信号の色情報を連携させて、バスに送信し、交差点での安全な走行を支援する検証をします。これにより、バスに搭載しているさまざまなセンサが捉える情報を超えた、より広範囲の情報を連携することができ、安全性が高まります。

これらの検証でノウハウを蓄積して、ゆくゆくは、自動運転化できる路線では大型二種免許が必要となる運転士が乗車しないで運行する、自動運転レベル4を目指していきます。

持続可能な公共交通

富永課長は「人口減少など社会情勢を踏まえて、現行の輸送サービス水準を今後も継続していくことは難しいと思っています。そのため、小手先だけの改善ではなく、次世代モビリティのような先端技術を活用した新しい発想での取り組みが必要です。交通事業者・行政・地域の皆さまが一緒になって新しいサービスへの理解を深めていくことが持続可能な公共交通の実現につながると思います」と将来を見据えます。

自動運転レベル4の実現には、安心・安全な運行が必要です。今回の実証実験で検証をしっかりするのと同時に、自動運転バスに対する市民の理解を得て、人とデジタルが上手く共存共栄する、平塚市の公共交通を構築していきます。

5段階の自動運転レベル

今回は、「レベル2」の実証実験です。運転席に人は座りますが、アクセル・ブレーキ・ハンドル操作は自動制御し、運転士は安全確認などの判断やシステムの対応範囲を超えた時だけ操作します。

システムによる監視	レベル5	完全自動運転
	レベル4	特定条件下での完全自動運転
	レベル3	条件付き自動運転
ドライバーによる監視	レベル2	特定条件下での自動運転機能
	レベル1	運転支援